

刊行によせて

日本常民文化研究所、これからの100年に向けて

2021年度はコロナ禍のまっただ中にあり、日本常民文化研究所の活動も大きく制約を受けました。常民文化研究講座をはじめとする各種研究会・シンポジウム等はすべてオンラインでの開催を余儀なくされました。また、所員の研究活動への制約も大きく、共同研究やフィールドワークなど調査研究活動も十分にはおこなえませんでした。そうした意味では日本常民文化研究所の活動は停滞したといえるかもしれません。しかし、そうした時だからこそ、さまざまなことを創意し、新たな挑戦もおこなうことのできた年だったといえます。横浜市歴史博物館との共同展覧会や博物館相当施設化への取り組みなどがそれにあたります。

未曾有のコロナ禍のなか、日本常民文化研究所は創立100周年を迎えました。1921年にアチック・ミュージアムとして発足して以来100年となります。また、1981年に神奈川大学の付置研究所となってから数えて40年の節目でもあります。日本常民文化研究所では、2021年から25年までの5年間をセンテニアル・イヤーズと位置づけ、100周年記念事業をおこなうべく準備を進めてきました。常民文化研究講座も、この5年間は100周年を記念するテーマを設定して開催することとなり、本年度がその第1回目となりました。

2020年、日本常民文化研究所では次なる100年に向けて将来構想を策定しました。本年度はその第一歩となります。将来構想のなかで、日本常民文化研究所は二つの大きな柱を将来計画として提出しています。一つは、本年度で終了する国際常民文化研究機構が担ってきた共同利用・共同研究の拠点としての機能を受け継ぎ、さらに発展させることです。国際的視野をもって常民文化を研究する機関として、積極的に共同研究を組織し、所蔵資料の共同利用を推進すべく、資料のデジタル化など具体的な活動計画をおこなっています。

そして、もう一つの将来計画の柱は、博物館機能の強化です。具体的には日本常民文化研究所を博物館相当施設として整備し、2022年度内に学内に常民文化ミュージアム（仮称）を設置することを目指しています。そのため本年度は横浜市や大学当局との折衝など具体的な準備の年となりました。博物館相当施設となり博物館機能を充実させることで、これまでにない新たな博物館型研究統合を目指すこととなります。それは、拠点化により活発化する共同研究の成果について展示など博物館事業を通して広く社会に発信しつつ、研究成果を学芸員養成や大学教育にも利活用することを目指します。それは、博物館機能を有するからこそ可能となる研究と教育の融合であり、社会貢献のあり方であると考えます。

2023年2月

神奈川大学日本常民文化研究所所長
安室 知